

## 野外教育活動の構造分析法 — 活動場面における学びから —

### The Structural Analysis of Outdoor Educational Activities — From the Learning at Activity Scene —

○大石康彦 井上真理子（森林総合研究所多摩森林科学園）  
田中千賀子（武蔵野美術大学）

キーワード：野外教育活動、構造、体験場面、学び、ビデオ

#### 1. はじめに

野外教育は、青少年の野外教育の振興に関する調査研究協力者会議（1996）が「青少年の知的、身体的、社会的、情緒的成長、すなわち全人的成長を支援するための教育」としたように、野外教育活動を通じた個人の変容を促すものである。野外教育活動がもたらす意識や行動の変容を明らかにしてきた多くの研究では、活動の全体あるいは一部分を一括りにとらえて検討している。しかし、星野（2002）が「行動変容の要因が何であったのかを実証していかないかぎり、本当の意味での野外教育独自の指導法も生み出せないのではないか」、張本・土方（2016）が「野外教育の特性をより理解するには、その構造（諸要素とその関係性）を明らかにすることが重要」と指摘したように、野外教育活動が意識や行動の変容をもたらす仕組みは、野外教育の特性や独自性を理解する上で重要な問題である。本研究は、野外教育活動に含まれる活動場面に着目した野外教育活動の構造分析法を提示することを目的とする。

#### 2. 方法

既往の文献から、野外教育の活動と体験のとらえ方を整理し、活動場面に着目した野外教育活動の構造分析法を提案した。次にスキー事例を対象に構造分析法の適用を試みた。2016年3月にF県において行われた3泊4日のスキーキャンプを事例として用い、1日目のゲレンデスキー（約2時間）と2日目の

クロスカントリースキー（約5時間）の活動内容をカウンセラー1名の頭部に装着した小型カメラ（CONTOUR HD1080P）により記録し、後にテキスト化して分析した。

#### 3. 結果と考察

##### 3. 1. 野外教育の活動と体験のとらえ方

野外教育の活動は、鶴飼（1923）による野外教育の形式の分類以降、束原（1993）による整理（身体的野外活動、知的野外活動、芸術的野外活動）、青少年の野外教育の振興に関する調査研究協力者会議（1996）による整理（野外活動、自然・環境学習活動、文化・芸術活動）など、繰り返し整理され、小森（2011）による整理（身体的活動、知的活動、情緒的・文化芸術的活動）におおむね収束している。野外教育活動がもたらす意識や行動の変容に関する諸研究は、このような野外教育活動のとらえを背景としている。これに対し、西田ら（2002）は「組織キャンプの体験内容自体に関する要因について検討されていない」という問題意識から、組織キャンプ参加児童の体験内容から5因子20項目の体験評価尺度を導き出したが、これは身体的活動であるキャンプに限定されたものであった。張本・土方（2016）が「体験内容については、個々人の体験の詳細までは十分な検討が加えられていない」と指摘したように、野外教育活動がどのように意識や行動の変容をもたらすのかを明らかにする方法が求められている。

### 3. 2. 野外教育活動の構造分析法

野外教育活動が意識や行動の変容をもたらす機構を明らかにするためには、意識や行動の変容が期待される活動主体＝体験者自身と、活動を構成するその他の要素との関係性に注目する必要がある。野外教育活動を構成する要素は、束原（1993）が自然環境（活動環境）、人（活動主体）、活動自体を挙げ、大石・井上（2015）が森林体験活動の構造を森林、活動者、ソフト、指導者の相互関係によって説明できるとしており、小森（2011）が野外教育の目的として挙げた、「個人と①地球・自然環境との関わり、②周囲の出来事（他存在）との関わり、③その人自身（自己：自分自身）との関わり」の3要素・観点を適用することが適当と考えられる。このことから、野外教育活動の構造分析法として、「野外教育活動に含まれる活動場面において個人と〔自然環境〕、〔他存在〕、〔自分自身〕の間に起きた出来事から、個人の学びが表出したと考えられる場面を抽出して検討すること」を提案する。

### 3. 3. スキー事例への適用

スキー事例におけるキャンパーと〔自然環境〕、〔他存在〕、〔自分自身〕の間に起きた出来事を抽出、分類した結果、ゲレンデスキー、クロスカンリースキーのいずれにも、キャンパーと〔自然環境〕、〔他存在〕、〔自分自身〕の間に何らかの出来事がみられ、ゲレンデスキーの場合は、〔自然環境〕は雪との関わり、〔他存在〕はカウンセラーからキャンパーに向けての技術的な指導などの関わりに限られていたのに対し、クロスカンリースキーの場合は、〔自然環境〕は雪との関わりに加えて樹木や昆虫、足跡など幅広い対象との関わり、〔他存在〕はカウンセラーからキャンパーに向けての関わりに加えてキャンパーからカウンセラーに向けての関わりやキャンパーとのキャンパーの間の関わりがみられた。さらに、〔自分自身〕についても、ク

ロスカンリースキーにはゲレンデスキーにはみられなかった意欲や挑戦などの表出がみられた。

### 4. まとめ

身体的活動であるスキーを対象に、ゲレンデスキーとクロスカンリースキーの共通点と相違点をとらえることができた。本研究が提示した野外教育活動の構造分析法には一定の有効性があり、この方法をスキー以外の身体的活動や知的活動、情緒的・文化芸術的活動に適用することにより、野外教育活動全般の構造を明らかにできると考えられる。

### 文献

- 張本文昭・土方圭（2016）：「教育」および「体験」に関するレビューと野外教育における課題と展望、*野外教育研究*、19(1)、27-40.
- 星野敏男（2002）：キャンプの〈知〉自然と人との教育実践から、筑波大学野外運動研究室編、勉誠出版、133-152.
- 小森伸一（2011）：野外教育の考え方、星野敏男・金子和正（監修）・自然体験活動研究会（編）：野外教育の理論と実践、杏林書院、東京、1-11.
- 西田順一・橋本公雄・柳敏晴（2002）：児童用組織キャンプ体験評価尺度の作成および信頼性・妥当性の検討、*野外教育研究*、6(1)、49-61.
- 大石康彦・井上真理子（2015）：野外教育活動としての森林体験活動の構造—分析枠組みの設定—、*日本野外教育学会第18回大会プログラム・研究発表抄録集*、82-83.
- 青少年の野外教育の振興に関する調査研究協力者会議（1996）：青少年の野外教育の充実について、文部科学省
- 束原昌郎（1993）：野外教育における環境教育に関する一考察、*東京学芸大学紀要第5部門*、45、167-172.
- 鶴飼盈治（1923）*日本アルプスと林間学校*、同文館、東京、1-514.